
2 7 時の星空散歩

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

27時の星空散歩

【Nコード】

N7986E

【作者名】

久芳

【あらすじ】

最近どうも、うまく眠れない。これっでもしかして不眠症かな。眠りにつけないあたしは、彼、に電話をかける。彼ならきっと、起きていると思う……

1話

眠れない。

眠いはずなのに眠れない。

眠くて眠くてたまらないはずなのに、まったくもって眠れない。

「なんなのよもう……」

あたしは眩き、ごろりと仰向けになった。

つい最近まで、布団にもぐればすぐ夢の世界だったはずなのに。嫌なことがあるうがなんだろうが熟睡して、次の日にはケロッとしていたはずなのに。

ここ数週間、あたしは満足に眠れていない。

身体も心も眠くて眠くて、昼間から大あくびを連発しているのに。家に帰ってゆったりリラックスして、使いなれたベッドに横になって、おやすみなさいと一人暮らしの自分にささやいて、いつもならそれですぐに眠れたはずなのに。十分たっても三十分たっても、一時間たっても二時間たっても、まったくもって眠れずにいた。

それでもいつの間にか眠って朝まで起きないのだけど、寝つきが悪いぶん、いつもと同じ時間に布団に入っても睡眠時間が足りない。寝つきが悪いのを考えて早く寝たら、今度は眠れない時間が長くなる。

ホットミルクもダメ、ラベンダーの香りもダメ、お塩を入れたお風呂も効果なし。

これってもしかして不眠症かな。

「……三時」

ケータイのサブディスプレイで、今の時刻を知る。今日、布団に入ったのは二十二時だ。

見たいドラマも我慢したのに、かれこれ五時間もベッドの上でこ

ろごろしている。こんなんだったらドラマ見ればよかった。最低でも七時には起きなきゃいけないから、これから寝れたとしても四時間しか眠れない。

毎日こんな感じの睡眠時間で、身体が平気なわけがない。目の下には深いクマができて、肌もボロボロで、お化粧のノリも悪い。休みの日にとことん寝だめして、それで一週間やりくりしているようなものだけど、そうしたら自分の時間がなくて部屋が散らかり放題になってしまう。

別に自分の中で大きな変化があったわけではない。高校を卒業して就職して、と環境が変わりはしたけれど、社会人になってもうすぐ一年だ。仕事で何か悩んでいるわけではないし、私生活で問題があるわけでもない。自分のしたいことだって普通にしていた。

そりゃあたしも向上心というものがあるから、常にあれがしたいこれがしたいと思ったりしているけど、今の自分に強い不満を抱いているわけでもない。イライラと気がたっているわけでもないし、何か大きな怪我をしたりショックを受けたりしたわけでもない。

でも、眠れない。

布団にもぐって、目を閉じて。眠れなくて、右向いたり、左向いたり、うつ伏せになったり。部屋が明るく感じて豆電球を消したり、暗いと思つてつけてみたり。時計の秒針がうるさくて、電池を抜いてみたりもしたのだけど。

掛け布団を頭までかぶって、苦しくなつて顔を出して。足が暑くて布団を蹴飛ばしたり、寒くなつてたぐりよせたり。胎児のポーズをとつてみて、それでもダメで大の字になつて。

あれこれためしてみても、いっそもう寝ないで起きていようと思つて徹夜をしてみれば、次の日の調子が最悪で、やっぱり眠らないといけないと思つた。

寝不足だと、頭がぼーっとする。妙に身体が冷えると思つたら、逆に火照りはじめたりもする。具合が悪くなつたり、身体に力が入らなくなつたりと、そんな状態で仕事をしたら、ミス連発でまわり

にまで迷惑がかかってしまう。

なにより、眠れない自分が腹立たしい。

あたしのストレス解消法のひとつは、眠ること。嫌なことがあつたらとにかく寝る。悲しいことがあつてもとにかく寝る。でも今は、眠れないからストレスがたまるばかり。

眠るのって大好きだ。人間、人生の三分の一は眠っているのだから。快適な睡眠のために、枕だって布団だってシーツだってこだわっているのに。

今まで普通に眠れていたはずなのに。

それでも、病院に行こうとは思わない。市販の薬をためすつもりもない。そういうものを頼らずに眠りたいと、なぜか自分の中で意地をはっているものがあつた。

意地をはればはるほど眠れなくなる。眠ろう眠ろうと思えば思うほど、どんどん自分が眠りから遠ざかっていってしまう。

「……眠れない」

あきらめて少し起きようか。

でも起きるといっても、これといって面白い深夜番組もやっていないし、夜中だと目がかすんで本も読みづらい。ただなにもなしに起きているのも、なんだかさびしい。でも、こんな時間に電話できるような友達も

「いるじゃん」

思いついて、あたしははつと目が覚めた。

ちよつとむかついた。目を覚ましてどうする、自分。

もしかしたらこのままだけに眠れていたのかもしれない。彼のことを思い出さなければ、眠れていたかも。ああもう、何で思い出しちゃったんだらう。いや、自分で考えたんだけど。彼は悪くないんだけど。

あたしは充電中のケータイを開き、ためらいもなくボタンを押した。

2話

『 もしもし 』

「宝くん、眠れない」

もしもし、も、こんばんは、も、なにも言わなかった。あたしは単刀直入に、今の自分を報告した。

これが電話番号を交換して初めての電話だということもおかまいなしだった。彼と出会ったのはつい数日前だということもどうでもよかった。まだ一通のメールも交わしていないのに、こんな真夜中に、あたしは迷いもせず彼に電話をかけていた。

『 …… 眠れないんですか？ 』

宝くんは、あたしの突然の電話に驚く様子もなく、ただ、淡白にそう返してきた。眠れないんですか、そうですか、と、一人ごちる声には眠気も何もない。むしろ、布団にもぐったままケータイを握るあたしのほうが、寝起きで機嫌が悪そうな低い声をしている。

『 それは、困りましたね 』

宝くんはあたしと同年だ。けれど、彼のほうが早生まれだから学年は違う。人生の一年先輩であるはずの彼はなぜか敬語まじりで、逆にあたしはタメ口で話す。なんだか、あたし、すごく態度がでない。

「最近ずーっと、眠れないの。ホットミルクとか、いろいろためしみてるんだけど、ぜんぜん眠れないの。こないだ会った時、あたしひどい顔してなかった？」

『 まあたしかに、化粧は濃かったけど…… 』

「悪かったわね」

ごめん、と、謝るむこうがわで、なにやら紙をめくる音が聞こえる。本や雑誌のように軽いものではなく、ぶ厚くて、重いものだ。

たぶんきつと、スケッチブック。

「絵、描いてるの？」

『うん』

「お邪魔？」

『ううん』

あたしが彼が起きていると思った理由。それは、彼が絵を描いているからだった。

油絵や漫画もやるらしいのだけど、基本はイラストらしい。宝くんはイラストレーターを目指し、アルバイトをかねもちして生活費を稼ぐ『夢見るフリーター』だった。

ちなみに、今のところ功績はないという。毎日アイデアを探し求めて散歩をしたり、バイトに精を出したり、気ままに絵を描いたりしていると彼は言った。活動時間は特に決めていないから、真夜中に描くこともある。その言葉を思い出して、あたしは今、電話をかけたのだ。

もしかしたらバイトだったかもしれない。もしかしたら寝ていたかもしれない。こうして話して、ようやくそのことに気づいた。かけるときは、絶対起きているに違いないと思っていたのに。

『美咲さん、明日も仕事だよね？』

「そうよ」

『寝ないとか大変じゃない？』

「すごく大変」

そっか……、と、うなずく宝くんは、鉛筆をはしらせているらしい。シャッ、シャッ、と小気味よい音がかすかに聞こえてくる。

『……あなたはだんだん眠くなある』

「絶対効かない」

『ひつじが一匹、ひつじが二匹』

「もうやった」

そっか、と、再び。正直、彼の声は適当だ。話をするもどこか上の空で、心はどこか遠くにある。今はきつと、絵に集中しているに

違いない。

そんなところに電話をかけて、やっぱり邪魔しちゃったな。切ったほうがいいよね。いまさらながら申し訳なく思い、あたしは切るね、と告げようとして。

『僕、今、星空の絵を描きたいんだ』

ふいに、彼の声がこつちに戻ってきた。

『画面いっぱい、青い色を重ねて、たくさん星を散らしてさ、その下に道を作って……まあなにかを描くんだけど』

何がいいかな？ と訊かれ、あたしは返事に困ってしまう。

『銀河鉄道の夜、みたいに列車を描くのもいいし、もちろん誰かを歩かせるのだっていいし、いっそ道の先に家があってもいいし』

それってちよつとありきたりじゃない？ 思ったけど、言わないでおいた。

『美咲さん、ちよつと歩いてみない？』

「あたしが？」

『そう。目を閉じてさ、この道を歩こうよ』

宝くんに促されて、あたしは目を閉じる。

「まずは、どうするの？」

『そうだなあ……』

そうだなあ。つまり、彼もあまり考えずに発言したのだ。それに素直に応じてしまった自分にちよつと腹が立って、あたしは目を開けた。

3話

『まずは、白をイメージしてよ』

「白？」

星空を歩くのではなかっただろうか。白って、彼の描く星空はそんなに星が多いとでもいうのだろうか。

『はじめから星空なんてイメージしてもつまらないからさ、手順をふんでみようよ。真っ白な紙に、一から絵を描いてみるんだ』

「時間がかかりそう」

『眠れないならいいじゃないか。時間をかけて考えたほうが、案外頭が疲れて眠れるかもしれないよ』

宝くんは、あたしを眠らせるためにこの話をしている。それに気づいて、あたしは再びまぶたをおろした。

「どうせなら子守唄でも歌ってくればいいのに」

『ごめんね、僕音痴なんだ』

「眠れなそうね」

『気絶はするかもしれないね』

軽口を叩き合って、電話口に笑いあう。こんな時間にあたしたちはなんて話をしているんだろう。恋人同士だったら、きつともつといい話をしているに違いない。

『それじゃあ、あらためて』

「うん」

『まずは白を、青くします』

「アバウトね……」

頭の中に、一枚の紙を思い浮かべればいいのだろうか。でもそうすると味気ない。あたしは思い切って、まぶたいっぱい青い色を広げてみた。

「あ」

『どうかした？』

「水色になっちゃった」

さほど絵に詳しくないあたしは、豊富な色の名前を語ることができない。でもせめて水色じゃなくて空色と言えばよかった。今あたしの目の中にあるのは、太陽がのぼりきったときのような、高く澄み切った空色だ。

『じゃあ、日を沈ませなきゃいけないから……夕焼けの色を、すこしずつ広げてみて』

彼の淡々とした口調を、乱してみたいとちらりと思う。けれどもなぜか、あたしは彼の声に口を挟むことができなかった。

夕焼けの色。あたしの頭ではオレンジとしかいいようのない色を、空の片側からすこしずつのぼしてみよう。彼の指示にしたがって、そこから徐々に、濃い青を……紺色を、藍色を。とにかく、夜空の色を広げていく。

「……だんだん、なってきた」

『じゃあ、まずは一番星』

まだわずかに夕焼けの残る空に、ひとつ、星を。

『その調子で、星を増やしてみてよ』

ふたつ、みつつ、よつつ。星を増やして、たくさん瞬かせて。

「……なんか、水玉模様になっちゃった」

『それは気持ち悪いね』

「もうさ、宝くんの絵を教えてよ」

笑われて、むっとしてしまう。けれどずっと目は閉じたまま。身体も、横向きになったまま、動いていない。さっきまであれほど寝返りをうっていたのが嘘のようだ。

『僕の絵は……そうだなあ、天の川とまではいわないけど、星が道を作っているよ』

「その道を歩くの？」

『違うよ。その道は、ずっと上。それこそ本当に空にあるんだ。それで絵の真ん中に、筆で白い道を描く。細くて、人ひとり歩くので精一杯の、どこまでも続いていく長い道』

白い絵の具で塗っても、先に描いた空の色で、綺麗に色は出ないんだけど。彼のその細かい説明も、ちゃんと頭にイメージする。

道を描けば、そこが地面だとわかる。地面、空と、あたしの頭にもだんだん奥行きが出てきた。

「じゃあ、地面には何があるの？」

『地面はないよ。道が宙に浮いているんだ』

宙に浮いた道。不安定で、波打っていて、先がゆるやかなS字になっている気がする。

『足元にもまた、星空が広がってる。その星をどうしようか今悩んでるんだ。見上げた空をそのまま鏡にうつしたみたいに、上下対称にしてみるのも面白いかも』

「……そうすると、なんか窮屈で嫌だな」

彼に言われる前に、あたしはもう、その道の上を歩いていた。

よくテレビで目にするような、宇宙のような星空ではない。夜にしてはすこし明るい青色があたり一面に広がって、こんぺいとうのような星が、上にも下にも右にも左にも、とにかくすべてで輝いている。でも不思議とまぶしくはなくて、今にも消えてしまいそうなぐらい儚い光でもあって。色は白のようで、蛍の光にも似ているように。

ゆらゆらとゆれるリボンのような道の上を、一人で歩く。服は今着ている白いパジャマ。裸足にすっぴんで、髪もボサボサで、でもなぜだか、顔色はいい。

4 話

「道ももつと、幅を広くしてよ。踏み外しそうでなんか恐い。星が遠くにありすぎて、見上げるのが大変。もつと近くにさ、手が届くぐらいにして」

『わかった』

「あと、一人で歩くのは心細いから、宝くんもきて」

『……いいよ』

声なく笑ったような、やさしい吐息が聞こえた。

不安定だった道幅が広くなって、あたしは彼のぶんのスペースをあける。するとどこからともなく宝くんが現れて、あたしの隣にすっと降り立った。

「ジャージ着てるの？」

『よくわかったね』

「そんな気がしたんだ」

着古してくたびれた、青いジャージ。色は青でも、この星空には決して溶けない、光沢のある青。それが宝くんの姿だ。

なぜか顔が見えない。星のおかげで明るいはずなのに、彼の顔だけが暗くなっている。

「前髪、邪魔じゃない？」

『このほうが落ち着くんだ』

かすかに、薄い唇が微笑んでいるのがわかる。話すたびにちらりとそのぞく歯が、白い。

『美咲さん、顔色いいんじゃない？』

「わかる？」

背が大きいから、顔を見て話そうとすると必然的に顔をあげなければいけなくなる。でもあたしたちは、ほとんど顔をあわせることもなく、それぞれ道の先や空をながめている。隣にいてという気配と、途切れることのない会話だけで、お互いを確認していた。

「この絵は、これからどうなるの？」

『決めてないんだよね。どうしようかな』

「どうしたいの？」

『いろいろ案はあるんだけど……』

まだ、考え中。彼はそう呟く。頭の中では隣にいても、話す声は遠い。それがなんだか、もどかしい。

「星座とか、描くの？」

『そういう予定はないんだ。描くとき、なんか本物の空を描くみたいだし。あくまでもこの空は、想像の中の星空にしたいんだ。……これはさすがに天の川みたいだけど』

空を仰ぎながら、宝くんが苦笑する。そしてなにか思案したかと思ったら、天の川に向かってふうっと息を吹きかけた。

『じゃあ、こうしようか』

彼が一人、うなずく。すると天の川が粉々に砕けて、そのかけらがあたしたちや道の上に降りそそいできた。

「星の道でもつくるの？」

『ううん、本物の川だよ』

言葉とともに、背後から道を伝って水が流れてくる。とろとろとなめらかな水はあつという間に足首までかさをまして、進む先をきらめく川にしていた。

歩くたびに、足もとでちゃぶちゃぶと水が鳴る。降りしきる星のかけらたちが川の底にたまるから、踏みしめるたびに、それが指の間に入り込む。

天の川の消えた空には、まだ星が残っている。密集していたのがなくなっただけで、あちこちで瞬き続けている。見知った星座はないけど、均等に並んでいるわけでもない。

肩についた星を手を取れば、それは一見ただの砂のようなのだけど、目を凝らせば違うのだとわかった。

「……これ、星の砂？」

『そう』

星空の中の川の底には、星の砂がしきつめられている。なんて芸が細かいんだろう。

宝くんが、頭についた砂をはらおうと、犬みたいに首をふる。かすかに輝きを残す砂は、雪のようにゆっくりと川に落ちていく。

それを見て嬉しそうに笑う宝くんが、ふいに、あたしのほうを向いた。

『僕、今、美咲さんと手をつないでる』

「……うん」

吸い寄せられるように、あたしたちは手をつないでいた。

そしてしばらく、無言で歩いた。話題を探すわけでもなく、話さないことが自然であるかのように。おだやかに呼吸をしながら、星空を見上げ続けていた。

川の水はすこし冷たくて。それとは逆に、宝くんの手はとてもあったかい。

『……実際にこうやって、星空を散歩してみたいなあ』

ややあって、彼はそう呟いた。

「こうやって？」

『こうやって、なにもないところでさ。宇宙じゃなくていいけど、ビルとかそういう建物がないまっさらなところで、空を見上げながら散歩してみたいなって思うんだ』

どこまでも続く道で、空を見上げながら、ぼんやりと歩く。たしかにそれは気持ちよさそうで、今のこの絵にもよく似ている。

5話

「じゃあ、今度一緒に行こうよ」

『……僕、今度とおぼけには会ったことがないよ』

「ずいぶん古臭いこと言うのね」

あたしが今度を今度のままで終わらせてしまうと、彼は言いたいのだ。

「今はほら、あたしも予定とかわからないからさ。今週中には連絡するから」

『僕には旅行資金がないけど』

「あたしが連れてってあげる」

太っ腹、と苦笑する宝くんにつられて笑おうとして、あたしは口元に手をそえた。

『……もしかして今、あくびした？』

「した」

したと同時に、口の動きが鈍くなってくる。

これは、いよいよ、きたかもしれない。

『眠くなってきたんじゃない？』

よかったね、と微笑む宝くんの声が、とても遠い。とろけていくような脱力感。星空の散歩道が、少しずつゆらぎはじめた。

「……ありがとう、宝くん。ごめんね、忙しいのに」

『いいよ、べつに。僕も煮詰まっていたところだしね』

じゃあ、そろそろ大丈夫？ その声までもが、あやふやに聞こえる。あたしはんーと声を漏らすだけで、それにまた、彼が笑った。

力が抜けていくあたしの手を、彼が強く握りなおす。それが想像なのか、それとも夢なのか、実に曖昧だ。

『おやすみ、美咲さん』

「おやすみ、宝くん」

言葉になりきれない声とともに、あたしは通話を切った。

ケータイを手離して、どっぷりと枕に顔を埋める。もともと、体を布団の中にうずめていく。

星空の中に、宝くんはいない。あたしが一人、星空の真ん中に立っている。

川の水が、引いていく。

星の砂が、崩れていく。

星空が、遠のいていく。

ああ、

眠れる……

「……眠れない」

もう、頭を抱える気力ですらなかった。

あれだけ、眠れそうだったはずなのに。

遠ざかっていく星空とともに、眠気まで去っていつてしまったのだ。

「どうしよう……」

もう一度星空を思い浮かべようにも、先ほどと何かが違う。宝くんと一緒に見上げた星空が、どうやっても出てきてくれない。

もう一度彼に電話をかけたら。そう思うけど、一度切ってしまう手前、またかけるのもしのびない。彼ももうすぐ眠るかもしれない。絵を描くかもしれない。もしかしたら、バイトの時間かもしれない。

これ以上、宝くんに頼るわけにはいかない。

でも、自力では眠ることができない。

「ああ、もう……」

呟きを布団の中にこぼして、あたしはにじんだ涙を乱暴にこすった。

眠れないのが、こんなに辛いとは思わなかった。

眠くて眠くてたまらないはずなのに。眠すぎて眠すぎて、身体が

ふわふわしているのに。それなのになぜか、目が冴えてしまっている。

もうどうしていいかわからなくて、祈るように手を組んでしまう。その手が小刻みに震えていて、胸に押さえつけて何とか止めようとする。

自分で自分の手を握っているはずなのに、うまく力が入らない。握り握られている手が、なんだかとても弱々しく感じてしまう。

星空の中でつないだ宝くんの手は、とてもたくましかった。

大きくて、あたたかくて。本当にここにいるような、すぐ隣にいてくれるような、ずつつないでいたくなるような手だった。

彼と手をつないでいられたら、あたしはすんなりと眠れるような気がする。

手をつながなくとも、話をするだけで、隣にいてくれるだけで、安心すると思う。

一人でいるのが、とても心細い。

別に、普段から一人でいるわけではない。よく、友達と遊びに行ったり、職場の人たちとお食事に行ったりしている。

けれど、どこか心が物足りなかった。

楽しみにしていたはずの一人暮らし。親に口うるさく言われることもなくて、掃除や洗濯は面倒だけど、好きなものを好きに食べて、好きな時間に好きなことができる、一人暮らしはとても楽しかった。けれどやっぱり、物足りない。

電気のついていない、暗い家に帰ってきたとき。自分で作ったご飯を、一人で食べるとき。テレビを見ながら、一人で笑ったとき。ささいなことが、なぜかむなしかった。

6話

だから、宝くに惹かれたのかもしれない。

仕事が終わって、一人で帰宅する途中。駅の近くで、華やかなネオンを照明に、路上似顔絵をやっていた宝くん。お客がまったく寄り付いていない彼に、あたしはなぜか吸い寄せられてしまったのだ。そして、絵を描いてもらった。寝不足で最悪な顔をしたあたしを、彼は嫌がりもせず、嬉しそうに描いてくれた。描き終わるまでの間、どうでもいい話ばかりしていた。

話なんていつでもしているはずなのに。話なんて、誰とでもしているはずなのに。

なぜか彼と話していると、楽しかった。

そして実物以上に綺麗に描いてくれた絵を片手に、お金を払って、連絡先を交換した。

なぜそうしようとしたのか、自分でもよくわからない。宝くに惹かれてしまった、としかいいようがない。

一人ぼつんと座って、誰にも見向きされていないのに、縮こまることもなく堂々としていて。あの長い前髪の奥に隠された瞳は、社会に出ていろいろなものを覚えはじめてきたあたしには取り戻せない、純粹さを残していて。

連絡先を交換したあと、握手をした。その手がとてもあたたかかった。

そうだ。その日だけは、いつもより早く眠れていた。

宝くに会いたい。ぼつりとそう思ったら、本当に会いたくなかった。今すぐ、この身一つで、宝くんの家に押しかけてしまいたい。

あたしは寂しかった。

高校を出て、社会に出て、良いものも悪いものも、綺麗なものも醜いものも見て。学生のころの、甘えていられる時間なんてまったくなくなつて。

それでも辛いだなんて思わなかった。不満があるわけでもなかった。これから大人になるんだから、いろんな思いをするのは当たり前だと思っていた。

でも、いつのまにか、それに心が疲れていたのかもしれない。夜、一人でベッドにはいるのは当たり前であるはずなのに。アパートの部屋の中、自分以外の人の気配がなくて、しんと静まり返ったのがとても不安だった。

だから、誰かにそばにいてほしかった。

あたしは祈る手をほどいて、そっと、宙にのばしてみた。

出会ったときにそうしたように。頭の中でそうしたように。宝くんと手をつないでみる。

真っ暗な部屋の中、あたしの手の中には誰もいない。握った感触も、ただの空気で、なにもありはしない。

宝くんに会いたい。

そして話したい。

手をつないで、一緒に散歩がしたい。

どうでもいいことを話しながら。そう、星空を見上げながら、散歩がしたい。

明日、仕事が終わったら、宝くんに電話しよう。

出なかったら。もしバイトだったら、バイト先に顔を出してみよう。もし路上で絵を描いていたら、また似顔絵を描いてもらいながら話をしよう。眠っていたら、家まで押しかけてしまおう。

彼に会ったら眠れる気がする。

彼といったら、あたしはきつと寂しくない。

そして話したように、一緒に旅行に行こう。

星空の散歩をしに行こう。ふたりで手をつないで、誰もいない道を歩きながら、夜空を見上げて語り合おう……。

なにを話そう……これといって思いつかない。でもきつと、きつと……会えばなにかしら話すのだと思う。

空を見上げて。たまに……宝くんの、あの純粋な瞳を見て……。

星空の下を、二人で……。

宙に伸ばしていたはずの手が、いつの間にか胸の上になっていた。
それに気づいたころには、あたしは

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7986e/>

27時の星空散歩

2010年10月8日15時18分発行